

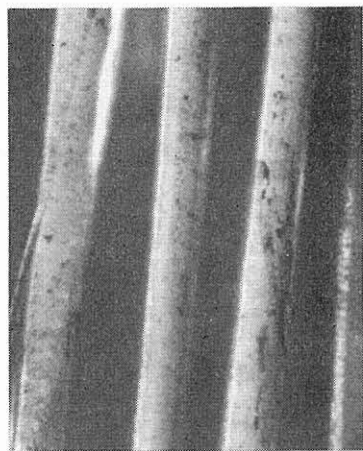


図7-2-13 墨をつけて洗った状態の羊毛筆（表面×77）

向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

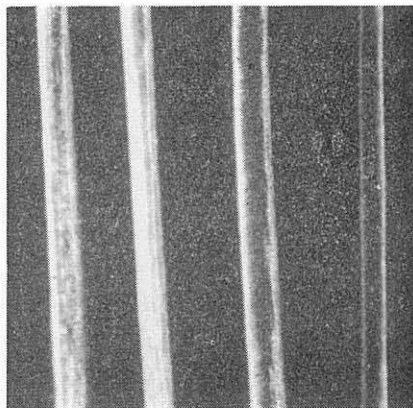


図7-2-11 細光鋒（先端の透明部分）×77

向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

せて使われる程度である。
 △鼬毛（鼬の毛は丈が短いので主に小筆に用いられる。キツ先がよく利き、墨含みもよく、かなり粘りもあるので、割合複雑な線状も出せる。しかし、摩擦による消耗率が高く、高級品に用いられる。
 △貂毛（貂は毛にふくらみがあり、毛先に弾力があり粘りもある。尾の部分が最上品とされている。

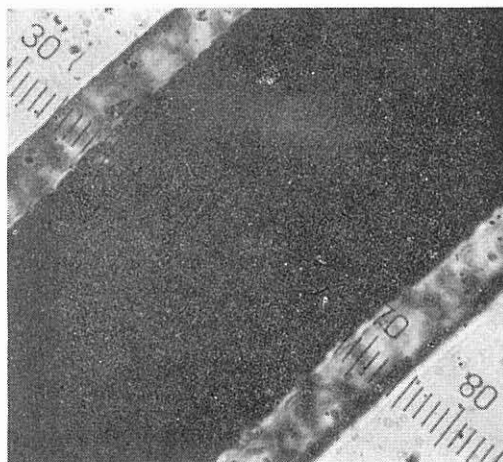


図7-2-12 羊毛（小皮・皮質・髓）×600

向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

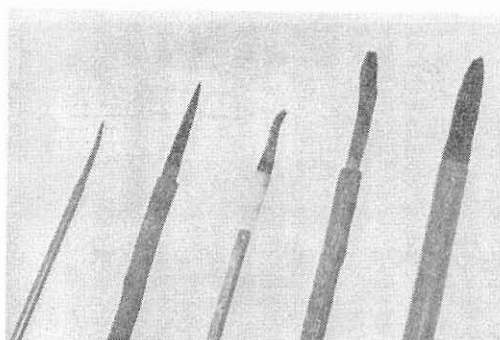


図7-2-15 人髪 の筆

左より胎髪（赤毛）同（黒毛）同（縮れ毛）頭髪（八十嬢）（六歳幼女）

木村陽山『筆』大学堂書店より

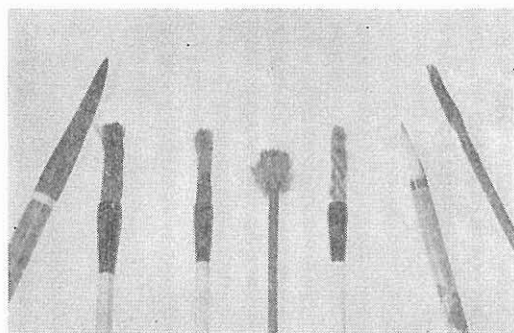


図7-2-16 鳥毛 の筆（和筆）

左より 孔雀 雉 鶴 鴨 ホロホロ鳥 七面鳥（羊毛混） 山鳥

木村陽山『筆』大学堂書店より

△狼毫▽狼ではなく、鼬属の野鼠の毛。毛先がよく利き、弾力もあるが、丈が短いので小筆に用いられる。

△栗鼠毛▽栗鼠毛は細くて柔軟であるが、弾力に乏しいため、他の毛と混せて用いられる。毛が美しいので化粧毛として用いられることが多い。

使用量の少ないもの

△野衾毛▽むささびといわれる動物の毛で、相当強い弾力があり、かつ、細い尖端は羊毫のように柔らかく、肩から腰にかけては剛いので、うまく使いこなすと面白い線質が出せる。他の毛と混用して小筆に仕上げられる場合が多い。

△麝香猫（香狸）毛▽太くて粗い毛で、弾力に乏しいので、他の毛と混用して用いられる。毛の性が野衾に似て、

永遠の誕生記念として
一生に一度しか作れない

胎毛筆

通産大臣指定 伝統工芸「熊野筆」の技術で

胎毛筆とは…………… 文字通り胎毛（誕生後、初めて髪を切る時の頭毛）で作る筆で、昔から、書道家の間では大変良い評価を得ております。

年ごとに高まる感動……………

お父さん、お母さんにお尋ねします。
もし、御自分の胎毛筆があったらと想像してみ
て下さい。やわらかな胎毛筆の手ざわりは、お子
さんの成長につれて益々感動を高める、まさに
永遠の記念品です。

一生一度のチャンス……………

筆の命は毛先にあります。生まれた
ままの頭毛の毛先でなければ筆と
しての価値がありません。もち
ろん記念品としても、やわら
かな触覚が失われてしまい
ます。



製品はすべて桐箱入でお届け致します。
箱寸法（縦32×横4.5×高さ4cm）

図7-2-14 胎毛筆のチラシの一例

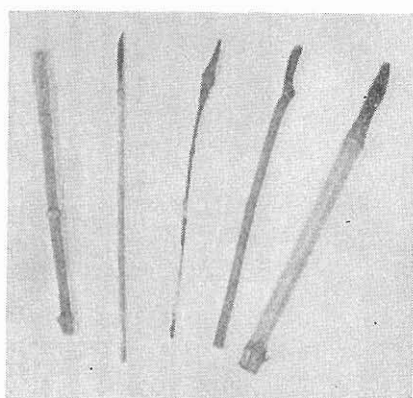


図7-2-17 草木筆

左より 竹(四方竹) 竹(小) 筆草
ばら 竹(大)

木村陽山『筆』大学堂書店より

れる。

その他、豚毛、猿毛、水牛毛、猪毛、熊毛、犬毛、胎毛、なども使われる。

△鶏毛△頸部の毛を多く用いるが、その他のところも用いられる。獸毛と比べると綿毛のような感触が特徴的である。

その他、鶴、雉、山雉^{やまどり}、孔雀、鴛鴦^{おしどり}、雁、鶩、白鳥、鴨などの毛も用いられる。

△竹筆△竹の尖を細かく割って槌^{つち}で軽く叩き、穂先は最も柔らかく叩きほぐして、全体の形を毛筆の様に尖らせて削ったもので、独特の線を表わすのに用いられる。

△檜筆^{ひのき}△檜皮の柔らかい所を薄く小片にしたものをいく片か括り^く、尖を鉛筆のように削って使うもの。マジックインキの尖に近い感触である。

尖端と根元は細く、中心が太いので、用法によっては面白い線も出せる。色彩が美しく、化粧毛にも用いられる。

△鼠鬚^{そしほ}△和筆で鼠鬚・鼠毫と呼ばれるものは、豚や狸の毛を使ったものが大部分であるが、蒔画筆(根朱筆^{ねしゅ})は純粹のものに限るといわれる。

△山馬毛^{さんば}△馴鹿^{かみしか}、羚羊^{とんがひ}の毛で、非常に太く、馬毛より剛強である。今日では、優良山馬はほとんど入手困難である。

△狐毛△数センチ位のものしか採れないので、小筆として用いられる。剛・柔が中間くらいで、とくに仮名には喜ば

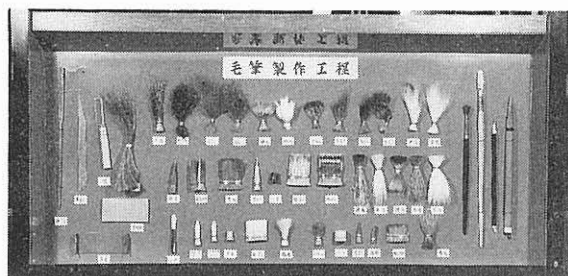


図7-2-18 毛筆製造の道具と材料

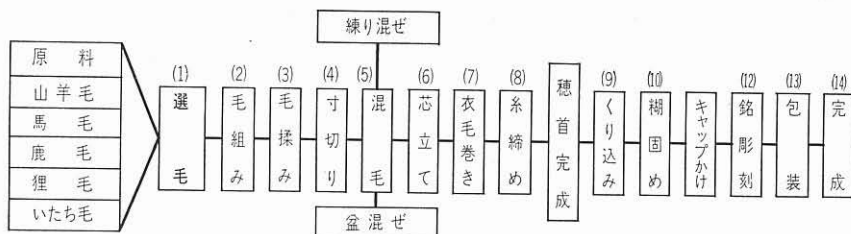


図7-2-20 製造工程

向久保健蔵『The筆』日貿出版社より

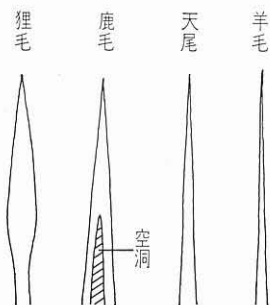


図7-2-21 原毛の形

筆』参照。

製造工程の大別
熊野筆の製造の工程は、大別すれば一二の工程に分けられる。穂首の完成までに八工程、軸、糊固め、キヤツツかけ、銘彫刻の各工程である(向久保健蔵『The

2 製造工程

△木筆△梵字等を書くのに用いた筆で、柳がよいとされている。
△蘆筆△主として毛筆の限界を越えた大字用に造られる。
その他、仙茅筆^{せんぼう}、薦筆^{せんびつ}、筆草などもある。

図7-2-19 毛筆の主な製作工程

熊野筆事業協同組合の資料を参考



製作工程3 毛揃え

揉んだ毛を櫛抜きして綿毛を取り除き、少量ずつ指先きで抜き取り毛先を積み重ねて毛揃えします。



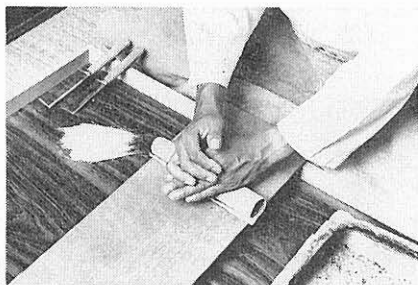
製作工程1 選毛、毛組み

筆の種類により、それぞれ必要な原料を選毛し、量り組合せをします。作業をしているのは羊毛の良し悪しを選別しているところ。



製作工程4 逆毛、摩れ毛取り

毛揃えした、一握り位いの毛の量を完全に毛先に揃えて、小刀で逆毛、摩れ毛等を指先の感触の働きにより抜きとります。



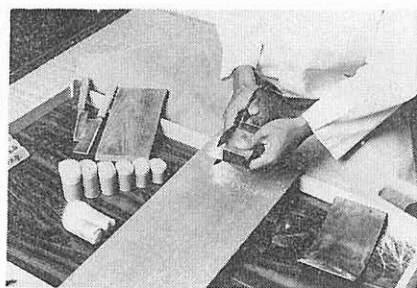
製作工程2 火のし、毛揉み

毛揉みは各種の原毛に靱殻を焼いた灰をまぶし、火のしを適当にあて、速かに、鹿皮に巻いて揉み乍ら毛の素性を直し、油を抜きとります。この工程は墨含みを良くするため大切な作業です。



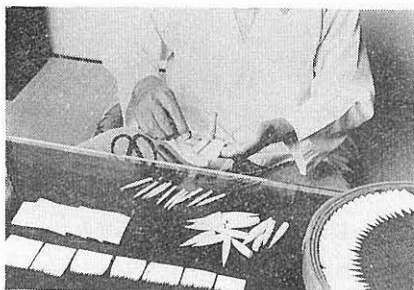
製作工程7 芯立て

練り交ぜた毛の適量を取り、芯立筒（コマ）に入れて太さを規格に合わせます。写真は出来ばえを指先の感触で試しているところで、不必要な毛は更に抜き取り、乾燥させます。



製作工程5 寸切り

命毛、喉、腹、腰（命毛は先端、喉は先端に近く腹はこれにつぐ、腰は下部）とそれぞれの寸に切り分ける。各種の毛、第一段（命毛）は小筆の場合、狸、鼬、猫等の毛を用い、柔毛では上質の羊毛を使用する。二段の毛（喉）は墨含みをよくするため羊毛を用い、三段、四段、五段（腹、腰）の毛は弾力をつけるため、剛毛（鹿毛）等を使用する。



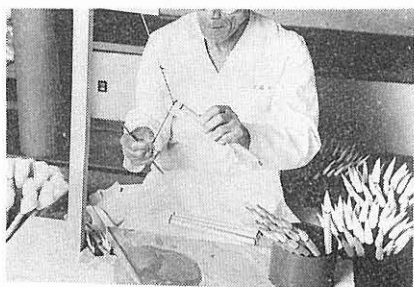
製作工程8 衣毛（上毛）巻き

衣毛は芯の原毛より上質の毛を芯の練り交ぜとほぼ同じ工程をたどって作ったもので、薄く延して乾いた芯に巻きつけて更に乾燥させます。



製作工程6 練り交ぜ

寸切りした毛を、薄くのぼし、幾度も折返し交ぜあわせる。さらに残っている逆毛等を取り除き完全に交ぜて薄糊をつける。



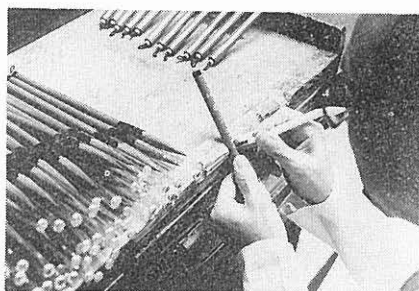
製作工程11 仕 上 げ

糊を穂首（毛の部分）に充分含ませて櫛でとき糸を穂首に巻きつけ、まわしながら、不必要な糊を除き型を整え乾燥させ、キャップをはめます。



製作工程9 糸 締 め

乾燥したら根元を麻糸でしめて焼きごてをあて少々焼いて速に締める。これで筆の穂首（毛の部分）が完成します。



製作工程12 銘 彫 刻

彫刻の要領は三角刃で軸を廻す働きを主として大体運筆順の反対コースをたどって彫ります。こうして一本の筆が完成されます。



製作工程10 く り 込 み

一定した長さの軸を回転させながら小刀で穂首をはめる部分の肉を削り取り穂首を接着剤にて固着させます。

注 図7-2-20とは若干呼称等相違している。

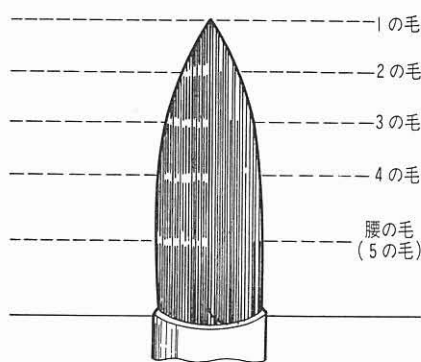
選毛と毛組

(1) 選毛。筆の種類や特徴により、それぞれに必要な原料(原毛)を選びだす。選毛は、特に山羊毛を中心に行われる。

山羊毛は、薄皮に付いている。その一房ごとに手に取って肉眼で選別する。先の良いもの、根元から先まで光沢があり、先端にゆくにしたがって細くなっているもの、先の短いもの、光沢のないもの、特に丈の長いもの、短いもの等に分ける。馬毛のばあいには、毛先、色、丈により選別する。

(2) 毛組。筆の種類や特性を考えて、適量の原毛を組み合わせる。毛組は、選毛とともに、特に多年の経験が必要とされる。

毛組は、製作される筆によりそれぞれ違うので、一様ではない。太筆のばあいについてその配合の割合を示すと、以下のようなになる。



太 筆	小 筆
1の毛……羊毛・狸毛・馬尾	馬毛・イタチ毛・羊毛
2の毛……羊毛・馬尾	狸毛・猫毛
3の毛……羊毛	イタチ毛・羊毛・ じゃ香猫
4の毛……鹿毛	羊毛・馬毛
腰の毛 (5の毛) ……鹿毛・馬毛	馬毛・鹿毛

図7-2-22 毛筆の形造り

一の毛……山羊毛、狸毛、馬尾(天尾)を
全体の約二〇%の量にする。
二の毛……山羊毛、馬毛等を全体の約一
〇%の量にする。
三の毛、四の毛……あわせて全体の三五
%くらいの山羊毛、鹿毛とする。
五の毛……鹿毛、馬フリ(弾力のあるも
の)を、全体の約三五%程度に組み合わせ
る。



図7-2-23 毛揉み

ただし、三の毛、四の毛は、一の毛、二の毛がさがるばあいもある。

毛揉みと寸切り

(3) 毛揉み。毛揉(も)みは、各種の原毛に粃殻(もみから)を焼いた灰をまぶし、火のしを適當にあて、速かに、鹿皮に巻いて、揉みながら毛の素性をただし、油分を抜きとる。この工程の目的は、毛の曲りを修正し、あわせて筆の墨含みを良くするために油抜きをすることにある。

(3)-1 櫛抜。獣毛の綿毛を取り去る工程である。毛に金櫛をかけて、綿毛を取り、ふたたび毛に櫛をあてて、その櫛の目より綿毛のついていない毛をぬきだす。

逆毛返し。毛揉み等により毛先が入れ違った(逆毛)時に、毛の根元が太く先端に向ってしだいに細くなっている性質(これをテーパーという)を利用して、向きを整える過程。

毛を板の上に薄くのせ、真中に板の端を当て、前後にすりつけると、毛は互いに根元(太い方)に分かれてゆく。こうして片方を返して、毛先をそろえる。また、この過程では、摩れ毛も取り除く(摩れ毛取り)。この工程は、普通は省略されるが、毛先が入り乱れたりした時などに実施される。

(3)-2 櫛抜き(盆混ぜ)。櫛抜きをしながら、盆板の上に平均してひろげて、混ぜ合わせる。

(3)-3 火のし。盆板の上にひろげられた毛に、まんべんなく粃殻の灰をふりかけ、火のし器で押えて加熱する。この際、温度は摂氏一〇〇〜二〇〇度に達する。

(3)-4 毛揉み。火のしされた毛を、素早く鹿皮に強く巻きこみ、始めは柔かく順次力を加えてもみこむ。この時には、毛を折らないように注意する必要がある。

(4)―1	(4)―2	(4)―3	(4)―4	(4)―5	(4)―6	(4)―7
先 寄 せ	寸1 切の り毛	寸2 切の り毛	寸3 切の り毛	寸4 切の り毛	寸腰 切の り毛	塊 くわ

図7-2-24 寸 切 り

(3)―5 櫛掛け。さらに金櫛をかけて毛をそろえる。

以上の工程で、逆毛、摩れ毛等を指先の感触の働きにより、小刀で抜きとり、一握り程度の量の毛先を完全にそろえる。こうして揉んだ毛を、少量づつ指先きで抜き取り、毛先を積み重ねて、毛揃えをする。

(4) 寸切り。この工程は、主に筆の形を造るためのものである。この切り方(寸切り)および混毛により筆の形(恰好)の良し悪しがきまるので、きわめて重要な工程となる。

命毛(一の毛)、喉(二の毛)、腹(三、四の毛)、腰(五の毛)と、それぞれの長さに、寸切りされる(図7-2-22参照)。命毛には、柔毛で、上質の毛を用いる。喉には、墨含みをよくするための毛を用い、腹、腰の毛には、弾力を持たせるために剛毛(鹿毛など)を使用する。

(4)―1 先寄せ。毛揉みが終わった毛は、手金(弓形に曲った平たい金属板)にのせ、手板(縦二〇センチ、横幅一〇センチ)に、手金を軽くたたきつけながら、振動させ、先をそろえる。

(4)―2 寸切り(一の毛)。主に山羊毛の先の良い品物、狸、馬尾等が使用され、必要な寸木(丈を決める板、横幅約八センチ、厚さ約五ミリ、丈幅五種の木製の片削板)を当て、ハサミで切る。

(4)―3 寸切り(二の毛)。主に山羊毛、馬尾が使用され、一の毛に準じて、二の毛の寸木(三〜五ミリさげ)を当てて切る。

(4)―4 寸切り(三の毛)。主に山羊毛を用い、一の毛より一・二センチ(四分)ほど下げて切る。

(4)―5 寸切り(四の毛)。主に鹿毛が中心となる。一の毛に準じ、四の毛は約一・五センチ(五分)のところを、少しずつずらせながら切る。

第二節 熊野筆の生産と流通

一 熊野筆の生産

熊野筆の調査資料

熊野町は、〃全国一の筆の産地〃として、自他ともに認められている。既述のように、熊野筆の生産の歴史的推移は、遠く江戸時代の末ごろにさかのぼることができる。この節では、熊野筆の現在におけるその構造的特徴を、できるだけ客観的な資料等にもとづいて明らかにする。また、他の毛筆産地との歴史的・構造的比較検討を通じて、熊野筆の全国的地位をできるだけ明らかにし、なぜ熊野町においてこれだけ筆づくりが盛んになってきたのかということを検討する。

筆に関する参考文献や資料等は、本節において特にくりかえし使用されたものについて若干の注釈を加えておく。現在の熊野筆の具体的な調査を実施して、その結果を報告したもののうち、主要なものは、三つある。

広島通商産業局商工部中小企業課「昭和四十九年度モデル産地調査報告書（広島県・書画筆製造業）」昭和五十年三月（広島通産モデル調査」と略称することあり）。この調査は、昭和四十九年八月末現在で、広島県書画筆協同組合加入企業一一七社を対象として、調査票を配布し、回答のあった六〇企業について集計し（回収率五一・三％）、とりまとめたものである。この種の調査としては、全体的構造を明らかにしたおそらく最初のものであると思われる。

第七章 熊野の筆

国民金融公庫広島支店(水谷・矢田・田村)「消えゆく個性―伝統工芸品熊野筆―」昭和五十一年十月(「公庫広島調査」と略称することあり)は、「広島通産モデル調査」を参考に、熊野筆事業協同組合(以下、「熊野筆組合」と略称することあり)の協力をえて、同組合加入一七社のうち六〇社について調査をしたもの。つぎに、国学院大学経済学部飯塚ゼミナール「熊野毛筆産業実態調査報告」昭和五十三年度共同論文(「飯塚ゼミ調査」と略称することあり)は、ローラー作戦的に一軒一軒聞きとり調査を行っている。事業所一一軒、パート三六〇軒に対するアンケート調査を実施する一方、熊野町立熊野中学校の三年生と広島県立熊野高等学校(新設高のため二年生)に協力を求めて意識調査を行っている。

これらの「広島通産モデル調査」、「公庫広島調査」、「飯塚ゼミ調査」の三つは、熊野筆の生産構造の全体的解明のための貴重なデーターを掲載しており、本稿でもしばしば参照されている。これらの調査は、それぞれに調査の目的や対象、時期、方法などが違っている。しかし、それらを総合的に検討することによって、われわれは、熊野筆の現在におけるおよその様子を明らかにすることができる。なお、その他の資料については、それぞれの関連するところで、紹介することとする。

1 原材料と用具

原毛の種類

筆の原料としては、主に獣毛、鳥、植物の三つが用いられるが、そのなかでいちばん大量に造られ、安定して永く使われてきたのは獣毛である。鳥の毛を使った筆は、趣味的性格が強く、獣毛とほぼ同じような条件の筆を造ることは不可能に近い。鳥の羽根の場合は、その特性を生かして、おもしろい線

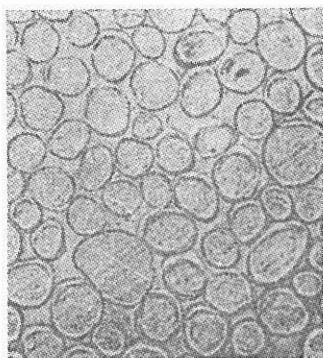


図7-2-2 羊毛の断面

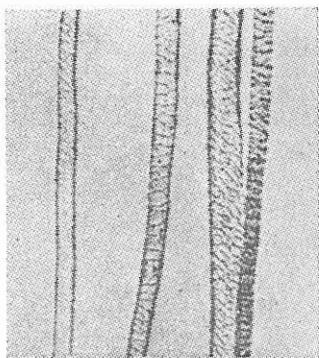


図7-2-1 羊毛の側面
宮坂和雄『墨芸の栞』芸艸堂より

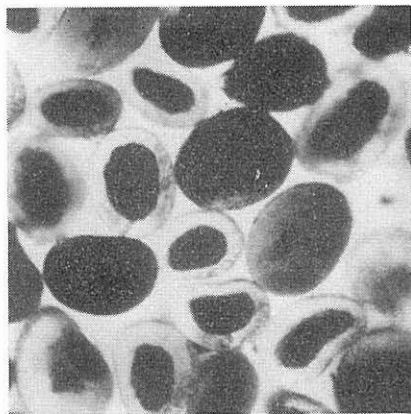


図7-2-4 馬毛の断面×103
向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

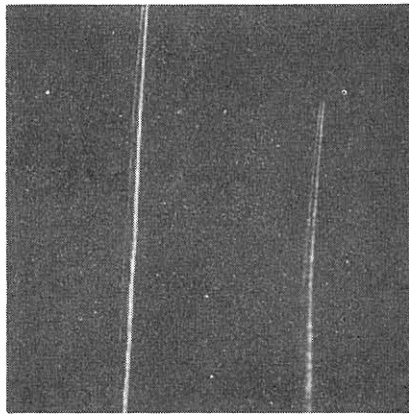


図7-2-3 狸毛の先端1.0cm×103
向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

毛皮の構造

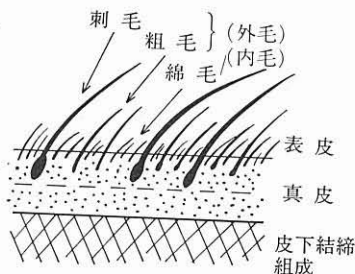


図7-2-5 毛皮の構造

向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

を表現するのに用いられる。植物の繊維を筆に仕立てたものも、鳥の毛の場合と同様であり、獣毛のように安定した製品を大量に造ることはできない。獣毛以外の材料は、竹筆で代表されるように、獣毛では出せないような線を表現することがねらいである。

動物毛の特色

動物毛は、その特徴を考慮して毛が選択される。動物の体毛は大きく、外毛と内毛に分けられる。外毛とい

刺毛…粗く丈夫な毛
綿毛…柔らかく刺毛の下に密生
粗毛…刺毛と綿毛の中間

っているものが多い。保護色あるいは警戒色として役立つもので、危険から身を守るのに役立っている。この粗毛は、先端部は細く、中央部が太く、基部がまた小さくなっているのが特徴である。また、中心部の細胞は円形になっており、髄質がある。このような粗毛のなかで特に長大なものを、刺毛と呼ぶ。刺毛は、強靱で弾力や光沢に富み、先端は長く伸びている。

一方、内毛は、肌毛、体毛、軟毛、綿毛などとも呼ばれるが、粗毛の下に動物の体に密着するように、生えている毛である。この毛は、体温を防護し、保持するのに役立っており、顔面や四肢の下部と尾部には少ない。内毛の特徴は、細くて柔らかく、たいていは縮れ毛で波状に屈曲していることである。また、髄質がなく、腰がない。

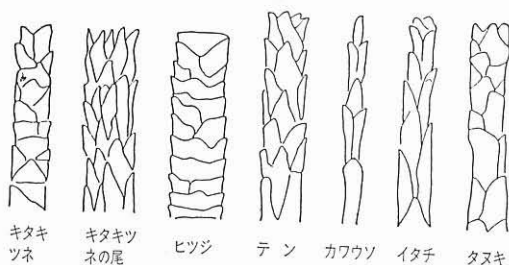


図7-2-6 動物毛の鱗片図

李家正文『筆談墨史』（増補改訂）学芸書林より

ところで、筆の材料として用いられるのは、外毛（硬毛）の方である。硬毛のようにまっすぐで先細りになっていると、筆に製造したとき具合がよい。つまり、それが一本一本の毛を寄せ集める働きをしやすくし、書いても筆が割れにくい。また、先端になるにつれて腰が次第に弱くなるから、筆が滑かに動きやすくなるのである。ただし、外毛は損傷される機会が多い。傷んだり切れたりした毛は筆の材料に適ないので除かれる。内毛のように毛が縮れているものは、規則正しく並べにくく、集束しにくいし、腰がないので穂には用いることはできない。

したがって、筆に使用する場合、粗毛、刺毛、綿毛（内毛）の中から綿毛を櫛でとり除き、素性のいい刺毛、粗毛を選別するのである。

△水毛▽また外毛の毛の先端部分は水毛といい、半透明の状態になっている。この水毛は、風雪にいちばん接する部分である。そのことが逆に水質性との調和をよくするので、墨汁によくなじむ筆ができる。また、水毛は柔らかく腰が弱いから、紙や布の面に柔らかく触れて、自由に滑り動きやすい。水毛のある毛で作った筆は、穂に伝わる力に応じて紙や布に墨汁をなめらかに移し、自由な運筆をもたらすことになるのである。

筆の生命は、穂の先端にある命毛にかかっているといわれるが、この命毛には、質が良く、水毛の完全なものが用いられる。命毛の弾性や水毛の耐久性の大小は、鋭敏に筆の性能に反映する。水毛が長く丈夫なほど良い筆になる。

動物毛の構造

動物毛は、皮質層、細胞層、髓から構成されている。筆の原料を選択するさいには、これらの物理的性質も考慮される。

皮質層の最外層にある表皮細胞は、多くの鱗状の層（鱗片層）になっており、魚の鱗のような形をした硬い鱗片が毛の先端に向かって、たくさん規則正しく並んでいる。この鱗片層があるために、水や墨汁は毛にたんに付着するだけで、繊維組織の内部までは浸み込みにくく、したがって濡れても腰の強さが保持される。また、筆の穂が墨汁を充分に含んで、穂に伝わる微妙な力に感応して、墨汁を穂先に向かって流動させることができるのも、鱗片層の作用による。それぞれの鱗片層の三分の二ぐらいは、皮質層から浮き出ており、この部分が隣接している鱗片に重なっている。この鱗片と鱗片との間隙に墨汁が浸み込んで、筆に加わる力にに応じて、その墨汁が押し出されるのである。さらに、鱗片の大きさは根元ほど大きく、先端になるほど小さくなり、水毛の部分に近づく、鱗片層と皮質層が見分け難いほどになってしまう。こうした物理的特性をもった動物の毛を用いることによって、根元ほど腰が強く、先端になるにつれて腰が次第に弱くなって、自由に運筆できる筆がつくられるのである。

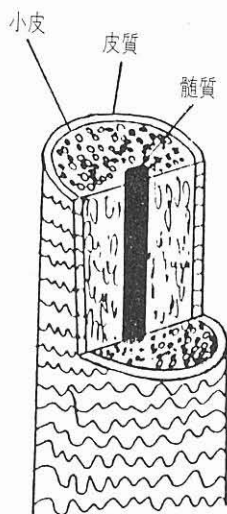
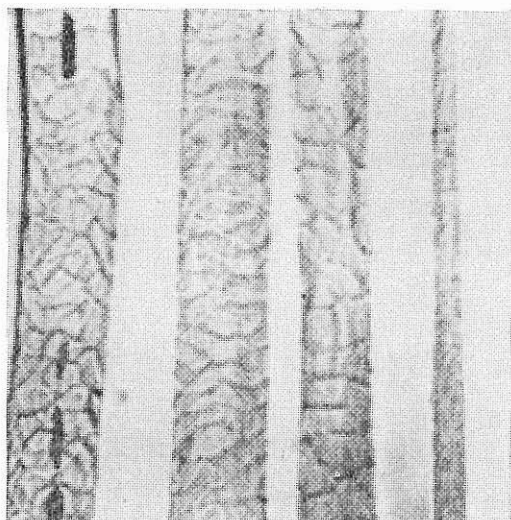


図7-2-7 毛の構造模型図

向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より

次に、細胞層（繊維壁、繊維組織などと呼ばれる）は、動物毛の基体となっている部分で、繊維の性質を支配している。ここには、楕円形の細胞がいくつも重なっており、メラニン色素という色素蛋白を含み、毛独特の色彩を



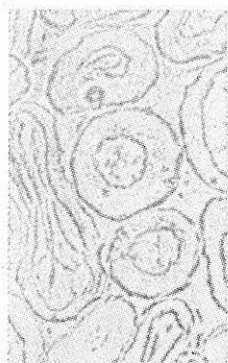
羊毛鱗片構造



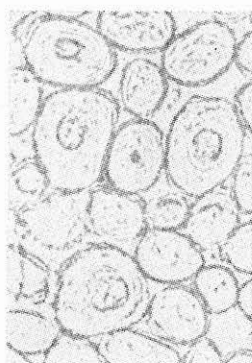
羊毛の鱗片の電子顕微鏡像

図7-2-9 羊毛の鱗片

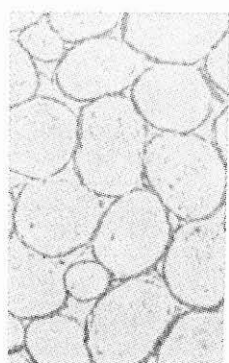
宮坂和雄『墨芸の栞』芸艸堂より



悪質の羊毛の断面



普通の羊毛の断面



良質の羊毛の断面

図7-2-10 羊毛の断面

宮坂和雄『墨芸の栞』芸艸堂より

もっている。細胞層の発育が良いほど毛の組織が緊密で厚く、強さも弾性も増加する。また、水が浸み込みやすく、濡れると膨潤して柔らかくなり、自由に変形する。この組織が膨潤の限界をこえると、繊維の腰がなくなるが、鱗片層によつて防がれている。このような細胞層は、繊維としての可塑性、捲縮性、弾性、柔軟性をうみ出す。髓の細胞は非常に小さく、メデュラともいわれ、海綿状の不規則な断面を持ち、クリンプスも鱗片の数も多い。

細胞層が大きく、髓が小さい毛ほど、穂の腰に粘りが出て、優れた弾性を示す。このように成熟した毛は、無色で光沢がある。逆に、細胞層が薄く、髓が大きい毛は、やわらかくて弾性がなく、墨汁になじみにくい。このような毛は光沢も悪くなり、遂には乳白色のケンブとよばれる死毛となるが、死毛は穂の材料としては役立たない。このように、穂材となる毛は、鱗片層に欠陥がなく、よく発育して細胞層が大きく髓の小さいものが厳選されるのである。

獣毛の種類

△羊毛▽羊毛はほかの獣毛に比べて細く、鱗状で縮れているため、毛と毛の間に空間ができ、墨含みがよい。また、非常に柔軟で、穂先や腰が自在に動き、しかも弾力に富む。このような羊毛は、ほかの毛を混入しなくともよい筆となり、寿命も長い。とくに、「純宿羊毫」は尖端が細く尖って柔らかく、高級品である。

△馬毛▽馬毛は剛強で丈が長いので、主として大字・中字用に使われる。運筆は割合楽であるが、繊細なものや線の潤などは求めにくい。羊毛や狸毫等と混ぜることによって味わいが出る。尻尾の毛(馬尾毛)は、毛尖がよく弾力にも富んでいる。美しいので化粧筆にも用いられる。

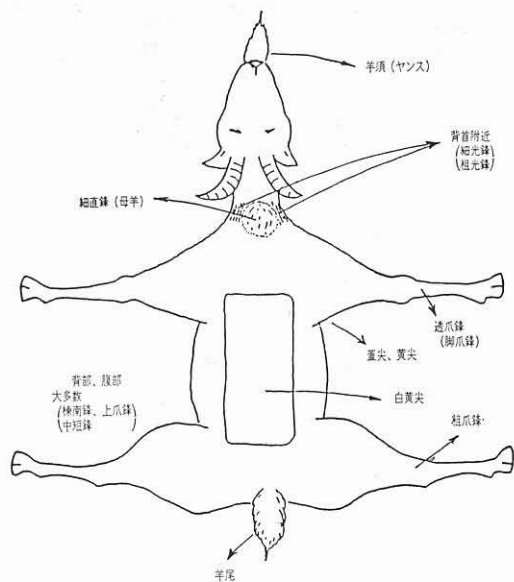


図7-2-8 羊一頭の原毛分布図

向久保健蔵『The 筆』日貿出版社より。

△鹿毛▽鹿毛は柔らかいが羊毛よりも剛く、耐久性も乏しい。また、毛自体にふくらみがあり、水含みがよく弾力があるので、芯や中程より根元に使用される。鹿毛は洗うと汚れが落ちやすいので、一本の筆で幾色にも使い分けができ、画筆や、ぼかし用の刷毛などに適している。

△狸毛▽狸の毛は、生えているところによって、毛の質、弾力などが異なるが、羊毛に比べて太くて剛い。狸毛は、根部が細くて、先端になるにつれて太くなるのが特徴で、それゆえ、毛先は弾力があって丈夫であるが、根元に近くなるほど腰が弱くなる。そのため、狸毛には根元に腰の強い毛を混ぜて用いるのが普通である。軽妙な趣向を表わすのに効果的である。

△猫毛▽猫毛は毛が短いので小筆が中心となる。「玉毛」とも呼ばれる猫毛は、綿毛が多いので、穂に適した硬毛を選び出すのは容易ではない。毛の質が最も良いのは、走り毛といわれる背筋、肩の毛であるが、量が少ないので高価であり、そのうえ早く消耗する。

△兎毛▽兎の毛は兎毫と呼ばれ、毛先が鋭く弾力に富んでおり、強く美しく速く書ける。細楷速書用筆としては理想的であり、粘りと耐久力が抜群である。古くから親しまれてきた毛であるが、今日では、極少量が羊毛に混